

シンポジウム報告：

## カテゴリーとしての「民族」の魅惑

永野 武

### はじめに

近年の日本における在留外国人数の急激な増加と定住化の傾向は、実質はともかく名目として「単一民族国家」を標榜してきた日本社会に対して、大きな衝撃を与えている。具体的には、「日本国居住者＝日本国民＝日本民族」、という図式の一端——前者——が激しく揺らいでいるということである。

しかしながら、これは、まったくの新しい流入者たちだけによって引き起こされた事態ではない。従来からの定住外国人——その大きな割合を占めるのが在日韓国・朝鮮人および在日中国人であるが——の存在自体が、先の図式全般に内包される矛盾を示していたのである。まずは、彼ら自身が、日本国居住者が必ずしも日本国民とは限らない、という反証であるということである。さらに、日本国籍取得・帰化をめぐるのは、「日本人になる」とはどういうことなのか、「そもそも日本人とは何なのか」という問題に直面せざるをえないため、日本国民すなわち日本民族というとらえ方に対して、反省の機会を提供してきたといえる。

もちろん、この後者の面に関しては、「アイヌ民族」などの先住民族問題の方が、より鮮烈な形で現れているといえるであろう。

「単一民族国家日本」の揺らぎとは、新規流入外国人の問題、従来からの定住外国人の問題、そして先住民族問題の三者が、まさに呼応する形でもたらされたものなのである。

この状況を詳細にとらえることや、「単一民族」という看板を放棄して名実ともに「多民族社会」へ移行するための路を模索することは非常に重要なことである。しかし、筆者の問題関心は、いわば別方向に向いている。すなわち、世界各地で頻発している民族・エスニック紛争（以下、民族紛争）が、国民国

家という政治様式の根本的な限界を示しているといわれることと同じ文脈で、日本社会も根本的な限界に直面しているのか否かということである。ここでは考察すべき点が次のふたつに分かれる。すなわち、ひとつは、国民国家の限界が世界的に訪れているのかどうかについてであり、もうひとつは、世界的な状況と日本社会の状況の異同についてである。

本稿での力点は、後者よりも、むしろ前者に置かれている。そのため、日本社会の状況から世界的な状況に視線を移し、第1に、世界的な民族紛争が生起してきた原因について、そして第2に、「民族」の客観性について若干の検討をおこない、「世界的な国民国家の限界」に関するひとまずの回答を導く。そのうえであらためて考察対象を日本社会に戻すこととしよう。

## 1. 諸民族紛争の原因

現在生じている民族紛争のうち、もっとも注目を集めている地域のひとつとして、ボスニア＝ヘルツェゴビナをあげることができるのであろう。そこでは、主権国家を有するに値する資格を「本来」もっていた諸「民族」が、どれだけの領土を確保することができるか、をめぐって激しい争いが展開されている。

この紛争の原因を、次のように説明することができるかもしれない。「本来」別々のものであった諸「民族」を、ひとつの「国民」としてくくことに、そもそも無理があったのだ。そして、その無理な役割を担っていたのが社会主義というイデオロギーであった。したがって、社会主義体制の崩壊こそが、現存する諸民族紛争の原因である、と<sup>(1)</sup>。

たしかに、旧ソ連の崩壊に象徴される社会主義体制の急激な退潮のために、地域紛争を抑制する作用が著しく減退しているという面があることは否定できない。しかしながら、これをもって、社会主義体制の形成が民族紛争の苗木を育て、その崩壊が民族紛争を開花させたとするのは、あまりに早計であろう。というのも、現在生じている民族紛争のすべてが、必ずしも旧社会主義国の領

域内で起こっているものばかりではないからである。「東」の崩壊によって凱歌を掲げているかに見える、いわゆる先進資本主義諸国においても、数多くの民族紛争が生じているのである<sup>(3)</sup>。

したがって、既存の主権国家すべてにおいて、ひとつの「国民」という、「本来的に」無理のある人間のくくり方をしてきた、ということにこそ注目すべきである。言い換えるならば、人為的かつ政治的な、したがって抑圧的な「国民」を、もはや従来のままでは維持することが困難になってきているということである。その限りにおいては、「特定の新しい世界秩序が発展しつつある」[Ronen,1988=1988:xxi]という見方は妥当であるといえるだろう。

しかし、これをもって国民国家という政治様式が限界を迎えていると結論づけることができるであろうか。現存する国民国家が現状維持の困難に直面しているということと、国民国家という政治様式の論理が限界を迎えているかどうか、ということはまったく別のことである。

内部に様々な多様性——もちろん、「民族的な」多様性も含めて——があることを容認するか抑圧するかは別として、それらの多様性を超える同一の価値を分かちもっている人々によって構成されている。これこそが「国民」の掲げるイデオロギーである。そして、そのイデオロギーの効力を減退させているのが、内部の多様性をほとんど考慮する必要がない、自らの同一性を疑う必要があまりないとされている集団、すなわち「民族」なのである。

もしも「民族」が、人間の意志から離れたところに「自然に」存在するものであることが証明されたならば、人為的なものである「国民」とはまったく別の論理・原則による政治社会の構築が提起されているといえるであろう。したがって、国民国家の論理が、異種の論理によって揺るがされ、限界に直面していると結論づけることができる。逆に、「民族」が、やはり自然に反する人為的なものであることが証明されたならば、国民国家の論理は、限界とはほど遠いところにあることとなる。

したがって、「民族」が客観的なものであるのか、それとも主観的なものであるのかを、検討しなければならない。

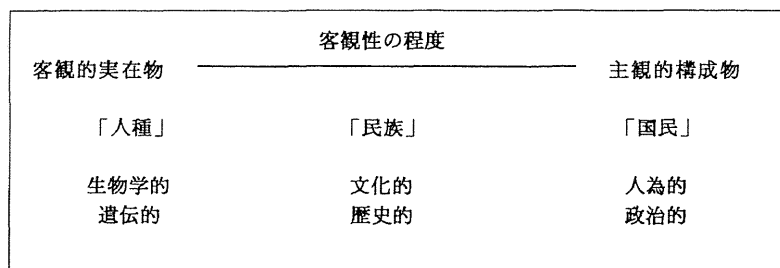
## 2. 「民族」の客観性？

「民族」（あるいはエスニック・グループ）が、客観的なもの（客観的実在物）であるのか、それとも主観的なもの（主観的構成物）であるのかという概念規定に関しては、今日に至るまで長く論争が続けられており、最終的な結論を得ているとはいえない。しかし、本稿ではこれらの学説史をつぶさに検討することはしない。

結論を先取りするならば、「民族」とは主観的構成物であると筆者は考える。それを証明するには、「民族」が客観的実在物であるということ——「民族」客観説——が否定されれば十分であろう。

人類を分類するカテゴリーは、無数存在するといえる。そのうち、「民族」客観説が、「民族」と同次元で深く関連していると考ええるものは、「人種」と「国民」であろう。まず「人種」とは、生物学的な、したがって「自然な」カテゴリーとされる。一方、「国民」とは、政治的な、したがって「人為的な」カテゴリーとされている。言い換えるならば、疑いようもなく客観的な存在としての「人種」が一方であり、それに比べればずっと客観性の低い「国民」がある、ということである。そして、この二つを両端とする客観性尺度の間に「民族」は位置づけられているのである。そこでは、「民族」とは文化的なカテゴリーとされる（図参照）。

図



この図によれば、「民族」は「国民」に比べれば、「より客観的」であるが、「人種」と比べれば「より客観的」ではない、ということになっているのである<sup>(8)</sup>。言葉の厳密な意味においては、客観的実在物と主観的構成物とは、尺度を形成するものではない。というのも、ほんのわずかでも主観的な要素が混入されているならば、それを客観的と呼ぶことはできないからである。

それでもなお、この客観性尺度の上に乗って、「民族」客観説批判を試みることにする。ただし、ここで議論の俎上に乗せるのは、「民族」ではなく、「人種」である。もしも「人種」が客観的実在物であることが否定されれば、「民族」客観説は、その土台から崩れ去ることとなるであろう。

まずは生物学的な面での「人種」に関する見解を見てみよう。1964年に発表された「モスクワ宣言」では、生物学者たちによって、人種の客観性が否定されている。人種とは分類学的な概念であり、人間を分類する上である程度役に立つかもしれない。しかし、遺伝的にみても、具体的に分類された人間の諸集団は、決定的な断絶によって分けられているのではなく、連続体を構成しているに過ぎないのである。また、集団内の遺伝の多様性が集団間のそれに匹敵するくらい大きいであろうことについては、専門家の間で意見が一致している[Rex, 1983=1987:21-22]<sup>(4)</sup>。

もしも「人種」が真に生物学的・遺伝的なカテゴリーであるならば、人間の染色体に存在するすべての遺伝子をあますところなく組み合わせなければならぬはずである。ところが実際には、肌や髪の色などいくつかの「重要と考えられている」遺伝子のみを選び出して、人間を「人種」に分類するための指標としているに過ぎない。この遺伝子の選出に際しては、あきらかに人間の意志が関与しているといえる。

以上に述べてきたことから、「人種」であれ、もちろん「民族」であれ、それを客観的実在物と見なすことができないことは明かであろう。その意味では、両者ともに「国民」と同様、人為的、政治的なカテゴリーなのである。したがって、諸民族紛争の存在は、政治様式としての国民国家の論理が行き詰まっているということではなく、その論理が一貫して効力を発揮していることを示しているのである。

### 3. 日本社会における「民族」の魅惑

前節で明らかにしたように、「民族」とは決して客観的なものではない。それは、人々の頭の中に、まさに主観的に存在するものである。ただし、そこでは客観的なものとして、主観的に想起されているのである。

それでは、なぜ、この主観的なものでしかない「民族」が、人々の生殺与奪に深刻に関わっているのだろうか。また、なぜ、そのような深刻な状況を打開するための有力な動員手段となっているのだろうか。

この間に対する確固たる回答を、筆者は未だ見いだしていない。ただ、「母なる先入観のぬくもり」[Finkelkraut, 1987]に抱かれたまま、判断停止が許される、ということは、要因のひとつとして指摘することができるであろう。そして、本稿のタイトルである「民族」の魅惑とは、この点に深く関わっているのである。

冒頭で示した図式の後一端、「日本国民＝日本民族」が、かなりの程度まで自明なものとしてまかり通っていた間は、少なくとも表面的には判断停止が保障されていたといえる。これは、「民族」がもつ魅惑の一側面である。しかし、この図式の自明性が激しく揺さぶられている現在の状況においても、やはり「民族」は、効力を発揮している。具体的には、「日本国民の中には日本人（民族）だけでなく、他の民族も存在する」、という形で。

そして現在の自明性の動揺が、「日本人」にとって居心地の悪いものであるならば、「単一民族国家」という看板があっさりと手放される可能性だって十分に高いといえる。しかしそれは、「より温かなぬくもり」を求めるための移行に過ぎず、決して根本的な変質ではないのである<sup>(5)</sup>。

## <注>

- (1) 同様の論法で、宗教的な相違による対立を民族紛争の原因と説明することもできよう。しかし、宗教的な相違が超歴史的に必ず民族紛争にまで展開されたわけではない〔山内、1993〕。したがって、このような説明も、短絡的であると言わざるをえない。
- (2) もちろん、激烈さや注目のされ方は様々ではあるが。
- (3) 冒頭の図式にしたがえば、日本は「国民」と「民族」が一致する、「きわめて稀な例」となるのである。
- (4) 連続体でしかないものの特定箇所、なぜ、どのようにして、決定的な「断絶」が認識されるのかについては、たとえばナショナリズムによる政治的な影響が指摘されている〔笠間、1992〕。
- (5) だからといって、筆者は現状維持を支持しているわけではない。

## <文献>

- Anderson, B. 1983 *Imagined Communities : Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso. = 1987 白石 隆・白石 さや訳『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』リプロボート。
- Barth, F. 1969 *Ethnic Group and Boundaries*, Boston: Little, Brown.
- Cobban, A. 1969 *The Nation State and National Self-Determination*, William Collins Sons & Co., Ltd., London.=1976 柴田 卓弘訳『民族国家と民族自決』, 早稲田大学出版部。
- De Vos, G. and Romanucci-Ross, L. (eds.) 1975 *Ethnic Identity Cultural Continuities and Change*, The Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research, Inc. → 1982 *Ethnic Identity Cultural Continuities and Change With a new introduction*, The University of Chicago Press.
- Finkelkraut, A. 1987 *La Defaite de la Pansee*, Editions Gallimard. =1988 西谷 修訳『思考の敗北あるいは文化のパラドクス』河出書房新社。
- Glazer, N. and Moynihan, D. P. (eds.) 1975 *Ethnicity: Theory and Experience*, Harvard

- University Press. =1984 内山秀夫訳『民族とアイデンティティ』三嶺書房。
- Issacs, H. 1975 “Basic Group Identity”, in Glazer and Moynihan [1975].
- 梶田 孝道 1988『エスニシティと社会変動』有信堂。
- \_\_\_\_\_ 1992『国際社会学』名古屋大学出版会。
- \_\_\_\_\_ 1993『新しい民族問題』中央公論社。
- 笠間 千浪 1992「ナショナリズムとレイシズムの交錯」梶田 [1992].
- Levi-Strauss, C. 1961 *Race et Histoire*, Suivi de L'oeuvre de Claude Levi-Strauss par Jean Pouillon, Editions Gonthier = 1970 荒川 幾男訳『人種と歴史』みすず書房。
- Rex, J. 1983 *Race Relations in Sociological Theory*. =1987 鶴木 眞・櫻内 篤子訳『人種問題の社会学』三嶺書房。
- Ronen, D. 1988 *The Quest for Self-Determination*, Yale University Press. =1988 浦野 起央・信夫 隆司訳『自決とは何か—ナショナリズムからエスニック紛争へ』刀水書房。
- Rothschild, J. 1981 *Ethnopolitics: A Conceptual Framework*, Columbia University Press, New York. =1989 内山 秀夫『エスノポリティクス—民族の新時代』三省堂。
- Stalin, I. V. 1913 *marksizma i nalodonarinnmh voprosta*. =1952 スターリン全集刊行会訳「マルクス主義と民族問題」『スターリン全集』第二巻、大月書店。
- 梅棹 忠夫 1991『二十一世紀の人類像』講談社。
- 山内 昌弘 1993『民族と国家』岩波書店。

(ながの たけし／日本学術振興会)